

〔研究ノート〕

リンダ・ホーガンの『卑しい魂』

——インディアン女性と共生——

生命は総てのものに宿っている、動かない石にすら宿っている。昆虫にも居場所があるのだから、世話をしてやるべし。……総てのものは神聖だが、特にコウモリは神聖である。

「ホースによる福音書」⁽¹⁾より

I リンダ・ホーガン

リンダ・ホーガンは一九四七年、アメリカ合衆国コロラド州デングヴァーに生まれた、チカソー族出身の文学者である。彼女は子供の頃、コロラド州のコロラド・スプリングスとドイツに住んだこともあるが、両親がオクラホマ州に住んでいたことが彼女にこの小説を執筆させた、ひとつの契機になったと思われる。

彼女自身の言葉によれば、子供の頃、家には本はなかったが、父と叔父が話してくれたお話が彼女の文学的素養となったとい

西村 頼 男

う。これは書物を通して文学を知る西洋的伝統とは全く異なる、インディアン的伝統である。

彼女は二十歳代前半、カリフォルニア州に移り住み、看護助手の仕事に従事し、その後、社会人教育を受けた。さらに、その後、メリーランド州に移り住み、そこで詩を書き始めた。コロラド州に戻った彼女は大学院にまで進学して修士号を取得し、創作課程も終えた。その後、創作活動は順調に進み、彼女は今日までにグッゲンハイム奨学金を含む種々の創作奨励金や出版賞を受賞している。

彼女の作品に対する評価は高く、ジョゼフ・ブルーチャック、ポーラ・ガン・アレン、N・スコット・ママイ、アンドルー・ウィゲット、サイモン・オティーズなどの詩人、作家、評論家はこぞってホーガンの作品を批評の対象としている。

彼女は創作活動の最初から、女性としての自覚が明確であり、生命のつなぎ手としての女性の役割を重要視している。このことは『卑しい魂』（一九九〇年）にも該当する。

Ⅱ オクラホマ州

スペイン人が現在のオクラホマ州地域に入った頃、平原インディアンと称されるカイオワ、コマンチ、アパッチ、それに、定住型のカドー、ウィチタ、ポーニーなどの部族がこの地域に住んでいた。それ以外で早い時期にこの地域に住んでいたのはアラパホ、オーセイジ、シャイアン、ユートイなどの部族であった。その後、一八一五年から四〇年頃の間にはチェロキ、チョクトー、チカソー、クリーク、セミノールの開化五部族が合衆国南東部から移り住んだ。こうしてオクラホマはインディアン諸部族の拠点となり、二〇世紀中葉には全国のインディアンの三分の一ほどが住むところとなった。

連邦政府は一八三〇年に強制移住法を成立させると、オクラホマをインディアン・テリトリイとして、ミシシッピ川以東に住むインディアンをこの地域に移住させた。その後、この地域に移住させられた開化五部族は南北戦争に際しては苦渋をなめることになった。元々、南東部に住み、白人の文明化政策を早くから受け入れた五部族は南北戦争に際して南部連合と協定を結んだが、南部の敗戦に乗じた連邦政府は五部族に賠償として土地を割譲させた。その後、自作農のための農地が解放され、さらに、一九世紀末に保留地で石油が発見されると、オクラホマのインディアンは新たな脅威にさらされ、もう一度土地を奪われ、その生命に危険

が及んだ。

作者は自分の先祖（チカソー族）が経験した、このような苛酷な歴史を意識しつつも、この小説をチカソー族や五部族の物語とはしなかった。オクラホマという、多様な部族員が住む一種の「インディアン国」が「文明国合衆国」の資本主義的キリスト教的価値観の犠牲にされる様を余裕をもって描写している。

白人の男性にとってフロンティアで生き抜くことは一種の通過儀礼であり、その儀礼に参加することは賞賛に値することとされた。したがって、その目標達成のための手段は問題とされない。このことは、この作品の裁判の場面で、殺人犯の罪に問われたマーディ・グリーンンの証言によって明白である。

（殺人は）農地を求めて土地を切り開いたり、食べるものを狩るのに似ている。彼ら（インディアン）はシカをめがけて撃たないだろう。そう、あんたらは陰謀と呼ぶだろう。あるいは、殺人と呼ぶだろう。しかし、ここじゃ、あれは生き延び策だ。（三二七ページ）

白人がフロンティア・ラインを西へと押しやっていた初期の段階におけるインディアンとの接触は直接的であった。しかしながら、その後の急速な資本主義の発展は会社組織という利益追求制度を西部に浸透させることになり、その結果、利益のみを追求する会社組織がインディアンの宇宙観と衝突するのは自明の理で

あつた。

また、白人男性にとつては、フロンティア・ライン前進の先兵となつて、インディアン土地を搾取することは「明白な運命」というキリスト教思想に支えられた、聖なる任務であつた。連邦軍がスーやアパッチを制圧するには多大な時間と経費を要したが、会社組織によつてインディアンを圧迫することは容易であつた。その最も端的な、歴史的な事例がオクラホマ州における石油採掘権をめぐる諸事件である。

Ⅲ 作品の梗概

白人が合衆国西部へ押し寄せると、ヒル・インディアンは生き延びるためにワトナ（オクラホマ州）を離れて山の中に移り住む。そのワトナの町には石油開発に群がる白人たちが満ち溢れている。白人たちはインディアンが所有する土地から石油が出ると知ると、一攫千金を夢見て、狂奔する。夢の実現のためには手段を選ばない白人男性はインディアン女性に結婚を申し込んで、遺産相続権を手に入れようとする。

この作品ではブランケット家とグレイクラウド家という二つの家族を中心に物語が展開する。町に移り住んだグレース・ブランケットは「オイル・インディアン」として裕福になるが、彼女は、ある日、教会へ向う途中、娘（ノラ・ブランケット）の目撃するところで白人男性たちに射殺される。その結果、石油採掘権

はノラに移る。すると、生計の手段を持たない白人（ウィル・フォレスト）がノラに接近して、やがて二人は結婚する。しかしながら、妊娠した彼女は、自分が子供を出産したら、夫に殺害されると恐れるようになる。

一方、グレイクラウド家を代表するのはベルである。彼女は孤児となつたノラを支え、石油開発業者が引き起こす大地の荒廃を歎く。また、彼女はインディアン生活を守ろうとして、白人流の家屋での生活を拒否して、戸外で眠り、ミツバチの世話をする。

この作品はノラとベルという二人のインディアン女性を中心に展開するが、二人とも最終的にはワトナの町を棄てて山に移る。

Ⅳ ノラ・ブランケット

川の教えるところを人々に伝えるのが使命である女預言者ライラはある時、白人が山で平和に暮らしている彼ら（山の人々／ヒル・インディアン）の生活を乱すだろうというお告げを受ける。そこで、ライラは自分の部族の人々に向かって、生き延びるためには白人の知る必要があると説く。人々は彼女を尊敬しているが、誰ひとりとして自分の子供を山の下町（インディアン名ワトナ、白人はタルバートと呼ぶ）に送ることは協力しない。そこで、彼女は自分の娘（グレース・ブランケット）をワトナに移り住まわせる。

この作品の冒頭部の数ページで述べられていることは、結末で、ライラの孫娘ノラ・ブランケットが身籠りながら山に逃げ込むことと見事に符号している。ヒル・インディアンは一八六〇年代にワトナの町を去り、山と断崖の地に引き籠もったが、ライラは新しい時代に適応するために白人の必要があると感じる。第一節で引用したように、マーディ・グリーンは殺人も生き延び策だと弁明するが、ヒル・インディアンも生き延びるために知恵を働かせる必要がある。そのためには、純血を象徴するヒル・インディアンの生活を送っているだけでは不十分であり、混血、白人の木こり、牧場主、さらには、石油王のいるワトナの町に下りることが大切であることを作者は冒頭で述べている。

ワトナに住むようになったグレースは所有地から石油が出て、「オイル・インディアン」として裕福になる。しかしながら、一九二三年の現在、彼女はある日曜日の朝、娘のノラとベル・グレイクラウドの孫娘（レナ）を連れて教会へ急ぐ途中、白人に襲われて殺害される。その上、彼女を殺害した犯人（白人）は殺害を自殺と偽装するために彼女の手に銃を握らせて、彼女の体にウィスキーを撒く。

そもそもグレースにとって資本主義や財産の個人所有制は彼女の理解を超えるものであるから、石油の採掘権として入る金銭の使い方が分からない。したがって彼女はグラント・ピアノを購入しても、演奏できずに、それを放置してしまう。このように、彼女はいわば、資本主義制度の犠牲者であり、ノラを産むことにそ

の役割が付与されているといえよう。

ノラ・ブランケットはベル・グレイクラウドと並んで、この小説世界を支えている女性である。彼女は母親の生命と引き換えに生き延びるが、自分が目撃するところで母親が殺害された衝撃から抜けられない。さらに、彼女は石油採掘権が母親から自分に移ったために、若年にして自分自身が白人から狙われる立場に立つ。

白人はきわめて強欲で、インディアンの土地を略奪しただけでは満足せずに、ノラに対して二様に自分たちの法律を押しつける。その第一は学校教育である。ノラが、母親が殺害された悲しみから癒える間もなく、就学年齢に達しているという理由で、オクラホマ州のカスターにある寄宿学校に入学せよという命令書が届く。ノラに対するもうひとつの法律の強制は後見制度である。彼女は未成人であるために、白人の成人（フォレスト）が後見人として指名される。インディアンは市民権は与えられておらず、ノラの身を心配するインディアンたちが彼女の後見人にならないように法的に仕組まれている（インディアンに対して市民権が与えられたのは一九二四年である）。そのうえ、フォレストは後見人の立場を利用して、勝手に彼女の財産を油田開発会社に投資して、彼女に多大な損害をこうむらせる。

しかしながら、ノラは母親とは異なり、決して犠牲者の役割だけを引き受けるわけではない。インディアンの子供にしては聡明だと白人から評されるに相応しく（二三ページ）、彼女は一旦

学校に入ると当局にあらゆる抵抗を試みる。第一日目、彼女は部族の衣装をまといて教室に現れることでオーセイジ族の女子生徒たちを唖然とさせて、一躍注目を浴びる存在となる。さらに、教師から部族の衣装を脱げといわれると、スリッパ姿となる（一二八―二九ページ）。

ノラが、連邦政府がインディアン文明化政策の重要な柱としていた学校教育制度に抵抗する姿は注目に値する。牢獄に等しい寄宿学校での体罰を描写したり、生徒が学校から脱走する様子を描写した小説は珍しくない⁽²⁾。この小説でも、ベル・グレイクラウドの孫であるベンの友人（カルヴィン・セバランス）は学校から脱走する（一五一ページ）。しかしながら、これは権力への抵抗としては弱く、ノラのように敢然として学校当局に抵抗する登場人物が出てくる例は少ない。ノラは結局、学校当局に自分が特別扱いされることを認めさせて、マニキュアを施す。

ノラの石油採掘権から得られる富を狙うのは後見人のフォレストばかりではない。彼の息子（ウィル）はこれといえる生計の手段を持たない若者であり、在学中のノラに近づき、うまく結婚にこぎつける。彼はインディアン⁽³⁾の遺物を収集しているが、それは資本主義社会では仕事と呼べるものではない。彼の友人が揶揄するように、「彼は仕事なんか要らないんだ。インディアンの奥さんがある」からである（一九三ページ）。

ノラはウィルとの結婚によって二つのことを達成する。その第一は子供を持つことであり、第二はインディアンとしての明確な

自覚を持つことである。ウィルが人間の骨で作られたチベットのトランプットを購入したことに恐怖を抱くノラは、自分がウィルにとつては過去の時代の人間と映っていることに気づく（一九五ページ）。そして、出産が近づくにつれて彼女の不安は高まる。すなわち、彼女の石油採掘権を引き継ぐ子供が生まれたならば、彼女はウィルにとつて必要な存在でなくなるだろうという不安である（三五三ページ）。ワトナの町では石油採掘権をめぐるインディアンが数多く殺害されており、ウィルも白人社会の悪の連鎖の中にいることは明白であるからである。

ノラは最後には山に戻るが、このことは小説の最初で明白にされている。ノラの母親グレースは籠作りの名人であり、男性や飲酒には目がなかったとされている（二十一ページ）。また、グレースは金銭で購入できる物を享受したが、ノラはグレースとは対照的で、町の生活には不適格である。彼女は幼い頃からヒル・インディアンの静かな生活に魅せられ、野外を歩き、動物に話しかけた。したがって、彼女が山に戻ることは祖母ライラも予想していたことである。

V ベル・グレイクラウド

ノラ・ブランケットと並んでこの小説世界を支えているのはベル・グレイクラウドである。彼女は一八六一年生まれとされているから、作中の現在である一九二一―三年では六〇歳余りとな

る。

彼女は山のような存在であると描写されているが（二七九ページ）、彼女はグレイクラウド家の長として、母親として、祖母としての役割を担いつつ、ノラの保護者でもある。また、彼女はワトナのインディアンたちからは聖人のように見なされているが（三二六ページ）、彼女は決して聖人君子的な存在ではなく、喜怒哀楽を露にする女性である。キリスト教的な意味での聖人とはおよそ異なり、ときには自己の感情を爆発させることがある。母親としてのベルは娘たちに対して厳しく、ある時、遊びに興じるルーズに対して、「世界は崩壊しつつあるのに、あんたのすることといえば、遊びに行くことだけ」（二〇六ページ）と叱咤する。この「世界は崩壊しつつある」という台詞はベルの根本的な考えであり、同じ台詞が繰り返し現れる（七〇ページ 一八五ページ）。彼女の行動が仮に奇矯に見えるとしても、総てこの考えに基づいている。

彼女がこの考えに基づいて行動するとき、白人の目には過激であり、無意味とも映る事件が起きる。その第一例は、ワトナの町でワシ狩り大会が開催されて、東部から大勢の狩猟家がやってきたときに起きる。インディアンにとって聖なる鳥であるワシが三一七羽も殺されたのを確認したベルは、狩猟家たちの車の窓ガラスを壊して抗議する（一一〇ページ）。ワシを詰める木箱を開けた狩猟家たちの顔は、中から立ちのぼるドライ・アイスの気体を受けて、あたかも、自らをむさぼり食い、大地を破壊してしまう

世界からやってきた訪問者のようであった、と描写されているように、彼らの行為は彼女には自滅的行為と映る（一一四ページ）。この狩猟家たちの行為には、白人がバッファローを全滅に追いやった歴史を重ねてみることができる。バッファローは狩猟家たちにとって絶好の狩猟対象とされ、その皮だけを得るために何百万頭も殺された⁽³⁾。バッファローが全滅した今や、インディアンにとつて聖なるワシが狩猟家たちに狙われる様子を描くことは作者にとつて大切な視点といえる。なぜならば、共生の第一歩は、ワシが剥製の装飾品や標本のために殺されるのを防ぐことにあるからである。

第二の例はコウモリをめぐる事件である。コウモリが恐水病を運ぶと断定されて、石油採掘の仕事に就けない無頼の徒たちは一羽一ドルの懸賞金につられて「悲しみの洞窟」にやってくる。ベルは洞窟の入口に立ち塞がって保安官のジェス・ゴールドを先頭にする白人の団を内部に入れない。彼女はゴールドに求められて自分を説得するためにやってきた夫モーゼスをも味方に引き入れて、催涙弾をくらうまでコウモリのために入口を死守する。（二七七―八五ページ）。

彼女は、その所有地から石油が出ることを予測した地質学的地図も完成しているために、白人と資本主義の両方から追い込まれてゆくが、精魂を込めてミツバチを飼育している。また、彼女は小説の冒頭部分で菜園で寝る習慣を堅持していると描写されている通り、インディアンの伝統を死守している。ライラ、グレー

ス、ノラのブランケット家三代を支えつつ、コウモリやミツバチを大切に彼女らは、人間と、人間以外の自然界のものが共生することを切に願っている。彼女のこの強い願望こそがこの小説に託された作者の願いであることに間違いない。

VI コウモリ／共生／女性

ユダヤ・キリスト教世界におけるコウモリのイメージはおよそ次のようである。バビロンの時代からコウモリは悪霊や幽霊とみなされていた。モーゼの律法によれば、コウモリは不浄な動物である。中世においては悪魔の姿とされた⁽⁴⁾。また、スコットランドでは、コウモリは魔術と結びついており、大地へのコウモリの下降は魔女の時間がやってきたことになる。さらに、コウモリは不吉の兆しとされて、一九七二年でもコウモリが家の中に入ってくると、家族に死が訪れるとされている⁽⁵⁾。しかしながら、世界各地には、コウモリを死者の霊魂として敬う民族もあり、中国では福の神の使いともされる。

ヨーロッパにおけるコウモリのイメージと、冒頭に紹介した「ホースによる福音」におけるコウモリに寄せる敬意は正反対である。作中において、恐水病を運ぶのはコウモリだとされるが、その科学的根拠は皆無で、ヨーロッパにおけるコウモリの負のイメージの継承にすぎない。白人の抱いているイメージをインディアンに押し付ける文化的植民地主義である。作中においてコウモ

リは一羽一ドルを稼ぐための口実にされており、資本主義社会を維持するためにコウモリを犠牲にしても当然という考えを表明したものである。

この作品において、コウモリに付与された意味はワシに対するよりも象徴的である。

歌をさえずり、また、冷たく深い闇の中にいるコウモリの二相の生命、木々の夫であるコウモリ、光と称される世界に生きる者たちからは憎悪される美しい生き物（二七九ページ）

キリスト教は「ヨハネによる福音書」が示すように、光を強調しており、白人は影の部分を見ようとはしない。したがって、コウモリは影＝悪魔を象徴するものとされ、コウモリは「野蛮な」インディアン⁽⁶⁾の迷信の対象にすぎないとされる。他方、ワトナ（タルバート）の事件を記録しているマイケル・ホースにとつてコウモリは貴重な生き物であり、崩壊しつつある世界を正常に戻すために、その声に耳を傾ける（二六九―七〇ページ）。

さらに、保安官ジェス・ゴールド（金）を先頭とする白人の団にはコウモリのねぐらである「悲しみの洞窟」の意味は全く理解できない。この洞窟には無数の隠れたほら穴があり、ほら穴の多様性はいわば人間の悲しみの多様性を表している。白人の団は懸賞金のためには無差別に発砲することが示すように、彼らは洞窟の中を見ようとはしない。ベルと夫は催涙弾のために降伏

するが、コウモリを守ったステイシーは洞窟の中を無事、通り抜ける。

この作品ではライラ、グレース、ノラの三代の女性が生命の担い手として生き延びてゆき、結びでは次の世代を担う子供も生まれる。作者は登場人物として、ブランドット家の女性とその家族、ジョン・ステインク、マイケル・ホース、ステイシーなどの男性などを配することで、タルバート（ワトナ）の白人の人間中心主義的・男性中心の社会を批判している。しかしながら、インディアン側だけでは共生は不完全である。すなわち、共生の思想はキリスト教側に立つ人物が人間中心主義から脱却して初めて広く浸透するわけであり、作者は特にそのために二人の宗教的指導者を登場させている。ジョー・ビリーとダン神父である。若いインディアンであるジョー・ビリー牧師は東部の神学校を終えて故郷のオクラホマで布教活動に従事しているが、人間中心主義のキリスト教に疑問を抱き始める。やがて、彼はインディアンがおかれている過酷な状況を詳しく知るにつれて、「もはや自分自身の説教を信じない」と妻に明言するまでなる（二三七ページ）。そのような彼は深夜、書斎でコウモリのメディシン・バンドル⁽⁶⁾を手にして祈るようになり、遂に牧師を辞退する（二七〇ページ）。その後、彼は「悲しみの洞窟」に入ることと自分の生き甲斐を取り戻す（二二二ページ）。ここでも、「悲しみの洞窟」は肯定的な役割をはたし、彼は父親の昔の姿を理解する。すなわち、彼の父親は元はメディシン・マンで、その後、キリスト教の牧師になっ

た。ジョー・ビリーはメディシン・マンとしての父親が洞窟内に残した聖なる空間の存在を知る。このようにして、作者は父子二代にわたって人間中心主義のキリスト教を放棄させている。

もう一人のキリスト教の指導者であるダン神父はジョー・ビリーのように辞職せずに、「異端」の思想を抱くようになる。ある時、油田採掘が原因の爆発音は神父を驚かせて、神父は「森の背後に言葉聞いた。それは地が話している声だった。それは大地の深く夢見るような声だった。……神の本当の言葉は森の中にある」（二八八ページ）と確信するようになる。しかしながら、神父はヘールたち資本家に、採掘を中止するようにと積極的に働きかけることは一切せずに、ただ自分の確信に基づいて、森の中に移る。資本家たちの破壊的行為には何ら責任を負わない。

作者が神父よりも女性に大きな役割を付与していることはビリーの妻マーサを見ればわかる。マーサは白人であるが、小説の展開とともにインディアン価値観を共有するようになり、彼女は髪の毛をインディアン女性のように伸ばし、顔つきも引き締まる（一七五ページ）。彼女はヒル・インディアン⁽⁷⁾のところに行くことでタルバートの人間ではなくなり、洞窟を襲撃しようとする保安官と対立する立場に立つ。

作者の動物、植物、石、川、大地などに生命を見てとる考えは最初に引用した「ホースによる福音書」に表明されている通りである。これは明らかに人間を頂点においたヒエラルキーを前提とするキリスト教とは相容れない。しかしながら、作者の意図はそ

の対立を強調することはない。また、白人とインディアンが対立する様子を描写することにはない。自然界の総ての存在物に生命を見てとるインディアン的思考に賛同する者ならば、白人であってもよいのである。マーサ・ビリーの存在意義はそこにある。純血か混血かによつて、連邦政府は石油採掘権から得られる金額を区別する。すなわち、役人は、春には混血インディアンだから一部分しか支給されないと言つたのが、今度は純血インディアンは金銭の価値が分らないから金額の一部分しか支給しないという。このように政府は一方的に規則を変更するが、純血か混血かが政治的に利用されている限り、共生の思想にはたどりつけない。作者はオイルインディアンという歴史的な事象を踏まえながら、環境問題の先例をオクラホマ州のオーセイジ族の保留地に見てとつた。白人にとつて、その土地は石油を採掘する場所にすぎず、さらさら畏敬の念を覚える必要のない所である。採掘のために草木が薙ぎ倒され、ベルの飼育するミツバチが狂気したように飛んでも、白人資本家ジョン・ヘールは歯牙にもかけない。あるいは、騒音のためにマーサが懐妊しないとしても——命を後代に継ぐことができないとしても——責任を感じる必要はない。

白人のために絶滅の危機に立たされたインディアンが、白人から受けた扱いと不正を忘れることは不可能であろう。われわれは白人の残した記録からだけでも、言語に絶する事実を知る。作中において、マイケル・ホースが述べる通り、白人は文字に書かれていないものは信じない（三六二ページ）。文字（文書・本）を

のみ信頼するという白人の論理に従えば、インディアンに対して行われた不正は記録にない場合は、なかったことになる。作者は、キリスト教の『聖書』が環境思想の観点からいかに不備かをマイケル・ホースに語らせている。彼に、『聖書』には「総ての生き物は平等だ述べているか？」（二七三ページ）と疑問を提起させることで、資本主義に直接的に深くつながっているキリスト教的人間中心主義を批判している。

作者はこの作品の後書きに次のように記している。

われわれのインディアン¹の年長者はわれわれに伝統を守り、神（魂）が引き続き生き延びるようにせよと、また、不正を引き起こした痛みと怒りを忘れ始めるようにと諭している。われわれは、総てこの世界にあつては仮初^{かりそめ}の旅人にすぎないことを、また、起きた事がどんなことであれ、われわれは、精神（魂）の力がわれわれから奪われることを拒否してきたことを知っている。（三七七ページ）

当然、作者ホーガンはインディアンだけが生き延びることを主張しているのではない。世界が崩壊しないために、白人は人間中心主義²資本主義から脱却する必要があると述べている。

注

(1) Linda Hogan, *Mean Spirit* (Ivy Books, New York: 1990), 361.

以下、本文中における引用は総てこの書物からのものである。ページ

数のみを記す。

(2) 例えば、次の作品でも体罰・仕置きが描写されている。

D'Arcy McNickle, *The Surrounded* (1936), 189.

(3) ハムリン・ラッセル「アメリカ野牛の物語」平野孝訳『アメリカ・インディアン』アメリカ古典文庫 第十四巻、研究社、一九七七年、二六〇―六三ページ。

(4) アト・ド・フリス『イーマージ・シンボル事典』山下主一郎主幹、大修館書店、一九八四年、四七ページ。

(5) I・オウピー／M・テイタム『英語 迷信・俗信事典』山形和美監訳、大修館書店、一九九四年、一四九―五〇ページ。

(6) 宗教的儀式に用いる道具。中に入っているのは夢やヴィジョンの中で見られたもの、あるいは、先祖から継承されたものである。メディシン・バンドルは人々を治癒する力や獲物となる動物を引き寄せる力などを有すると信じられている。

(二〇〇二年十一月六日受付)